

- Rosaldo, Renato 1989 *Culture and Truth : The Remaking of Social Analysis*. Boston : Beacon Press
(1998『文化と真実 社会分析の再構築』椎名美智訳, 東京: 日本エディタースクール出版部)
- 末成道男編 1995 『中国文化人類学文献解題』 東京大学出版会
- 若林正文 1994 「中国非主流地域のサブ・ナショナリズム 台湾」蓮実重彦/山内昌之編『いま、なぜ民族か』 東京大学出版会 40-64.



●**座長(渡邊)**— では、まとめをせずに直接コメントいたします。言いたいことは、私も台湾研究者ですが、この時代の範囲で考えると、ちょうど国民党支配当時の治世ですが、それはいまでも言われており、現在の台湾ではかなり批判されるのですが、台湾研究に対しては非常に意味があることです。それはつまり、今日いろいろな話があったけれども、「台湾は違う」と言って、中国研究を全部崩せるということです。

同じように中国で考えるとどうなるか。ところが今日、シンポの話は台湾に向けているということとは明白ですし、そういう点では攻撃力が非常に強い台湾研究が前時代の国民党時代における枠組のなかにあった。

ところがいま、政治は民進党が握っていますということは、台湾独立という前提がもともとあって、そこから台湾の歴史を復元しようとする、一連の日本時代というものに注目せざるをえない。台湾から中国を考えるというのはいまでは私はマイナーな感じがします。

それはちょっと議論に残すことにして、瀬川さん、よろしくお願いします。

●**瀬川**— 三尾先生の報告はたいへん刺激的で、実は原稿を早めにいただいたものですから読んでいたのですが、非常に啓発されるところが多くて、いろいろなことを考えました。その感想や質問を言い始めると、コメントの時間をはるかにオーバーしてしまうので、ここでは少しストックに、二つの視点からに限定させていただきます。

一つは、私がここにコメンテーターとして座っているのは、実は私が香港研究者だったからなので、香港との比較ということをちょっと述べたいと思います。もう一つは、人類学の対象設定という非常に一般的な問題です。

まず、香港中国人社会研究との比較の視点で申しあげますが、両者には非常に共通点が多いわけです。1960年代、1970年代の研究で言いますと、まさにいま三尾先生のお話にあったように、中国本土社会の代替物としての研究がおこなわれてきたのです。

その時代、植民者と言ったら何ですけれども、香港で言えばイギリス人、日本で言えば戦前の日本人研究者の研究史があって、そのあと地元の研究者による研究が勃興していったという推移も似ています。

ただ、相違点は相違点であります。まず、香港と台湾のサイズの違いというのは、けっこう大きな問題としてあると思いますが、これは言うまでもないことなので言わないとして、香港のほうは1997年に祖国復帰します。いまでも一国両制ですけれども、中国本土に返還されました。それに対して台湾のほうは、いまのお話にもあったように台独というものの模索が現在も続いていて、ここが対照的なところですよ。

ここで香港研究がたどった方向性というものを私なりに整理してみますと、たしかに代替物としての研究対象から香港そのものの研究へという方向をたどります。ただしそのなかに、二つの異なるベクトルが含まれていたわけで、一つは本土の代替物ではなくて、その代わり華南とか珠江デルタ、広東とか、そういう地域のくくりのなかへ香港を結び付けていくという地域研究、あるいは地域史です。ここは歴史研究が主体となっています。地域史研究としてのベクトルです。

もう一つ違うのは、香港都市社会研究の活動で、これは香港という植民地に形成された固有の歴史的経験を、取り立てて大きく扱っているものです。これは主に人類学者というよりは社会学者が手掛けたものであり、この二つの方向は似ているけれども違うわけです。

その前者、珠江デルタ側に結び付けていた研究というのは、結果的には中国本土社会の一部という視点を実践していきます。ただし中国一般の代替物ではないわけで、華南、広東、珠江デルタという枠組みで進展します。それに対して後者、香港都市社会の特殊性を追求していくほうは、1997年前後の香港人としてのアイデンティティの模索と結びついた研究です。この時期に非常に隆盛を極め、その後は、これは私がフォローできていないだけかもしれませんが、やや下火になっているかなという気がします。

その背後には、このあいだも六・四がありましたけれども、六・四の香港の民主化運動のデモ参加者数は主催者側の発表で何万人だったか、けっこう弱々しいものでした。民主化運動の弱体化と言っていいのかわかりませんが、そういうものとも連動しているような気がします。これは私の専門をはるかに超える話ですが。

そこまでが香港研究と台湾研究を比較した場合に言えることですが、次に、いまのものを踏まえまして、より大きな視点から「文化人類学としての対象設定の問題」ということを論じていきたいと思えます。

香港にしても台湾にしても、本土社会の代替物としての研究、その限界は明らかです。それは言うまでもないことですが、しかしもう一つ、三尾さんは控えめに研究歴20年と言いましたが、私はよくよく考えてみると30年近くになりますから、そんなに歳は変わらないと思えますがかなり前から中国研究をやっている者として言う、1970年代の研究というのは、かなり大きな枠組みがあったわけです。フリードマンという名前が、先ほども三尾さんの口から出てきましたけれども、フリードマンあるいはスキナーの研究がベースにあった時代には、例えばエミリー・エイハンが台湾の北部でのフィールド調査に基き、フリードマンモデルに対する批判や検証という議論をしていたり、ローレンツ・クリスマンが彰化平原でスキナーの六角形のモデルを検証したりしました。

当時はスタンフォード出版社からいろいろな書物が出されて、そのなかでは台湾研究・本土研究の境界を取り払って、例えばマージリー・ウルフの童養媳の研究と、マジョリー・トプレーの不落夫家の研究が、同じチャイニーズ・マリッジの研究として戦わされた時代なのです。非常に大きな枠組みがありました。そのなかでそれなりの位置付けというか意味を、台湾研究も香港研究も、場合によっては華人研究も与えられていたわけです。

振り返ってみると、われわれはそういう大きな枠組みをいま持っているかと不安になるわけです。台湾研究の土着化ということから言えば、土着化という言葉を学術的な意味で使ったのは、私の乏しい理解では陳其南氏がかなり早く、おそらくここから始まったのではないかと思うのですが、それが台湾社会独自性の強調の開始点ではあっても、土着化という概念は必ずしも台湾固有のものとして使ったわけではなくて、どこにも適応できるものとして提起なさったのだと思います。

それに対して、その後の台湾研究、香港研究を含めてですが、ほかに還元できない独自の対象と

しての台湾研究、香港研究に展開していきます。これはレベルの深まりということにもなるのですが、やはりそういう傾向は否定できません。

それにつれて、固有の対象理解というものを越えた、大きな視点というものは後退していったのではないかと思います。ジェンダー研究、あるいは移民社会論とかポストコロニアルなど、比較的小さな横軸になる、その時々パラダイムは入ってきますけれども、中国周辺社会を大きく巻き込むような大きな研究の枠組を、われわれが形成できたかという、そういうことはたぶんないだろうと思います。

台湾社会を本土の漢族社会から切り離して理解する、強調することの意味をあらためて考えてみるのですが、一見それは現在の台湾で起こっている、人々の自己意識に忠実になる試みのようにも見えます。でも、それは対象の固有性の記述に収斂してしまっていて、場合によっては出口のないインボリューションのようなものに突入する危険性をはらんではいないかということです。

研究対象設定における調査者と被調査者の権力関係、あるいは「まなざし」ということについては、人類学の中なかでも議論は非常に盛んです。倫理として被調査者の権利や主体性には配慮しなければなりません。これは内省的な人類学では金科玉条のように言われ、もちろん私はそれを否定する気は全くなくて、そのとおりだと思います。ただ、従来の研究対象設定を常に問い直す視点はもちろん重要ですが、それが自己目的化してしまったらナンセンスだと思うのです。

要は、そのような対象設定見直しによって、学術的なブレイクスルーが得られるかというところが重要だということです。台湾漢人についての議論も、「台独派の政治的な主張と無関係ではなかろう」という三尾さんのご指摘のとおり、それへの学術的な表現付与とも見られるような部分があるわけです。昨今、台湾史というものとリージョナル・ヒストリーとしての台湾史というものも非常に盛んなようで、私の学生で台湾へ帰っている者もいますが、けっこう台湾史というものを教える必要があるらしいです。

そういう雰囲気からすれば、社会的需要としては理解できますけれども、「多元一体論」と同様に、純粋な学術議論そのものというよりは、学術的な検討の材料として扱うべき性格のものかとも思います。

台湾社会を漢人の社会として見る、あるいは名指すことの妥当性うんぬんというものも、それ自体が意味があるというよりは、われわれがより広い研究視座の中につなげられるか否かこそが重要ではないかというのが私の考えです。以上です。

●座長— 中生さん、お願いします。

●中生— このテーマは「大陸漢族研究からみる台湾漢人社会」で、私は大陸漢族研究の立場から三尾先生へのコメントを求められていると知りました。そういった意味で、私も台湾の研究は多少足を突っ込んでいますが、大陸の立場からからみるというので、先ほどからコメントを考えていたところです。

ある意味でこの設定のしかた自体が、三尾先生の言う「台湾の政治的状況が台湾研究に影響を受けている」というところと関係していると思います。第一は大陸と台湾の対比。第二は漢族と言いますけれども、今回のシンポジウムで非常に重要な少数民族、台湾の場合は原住民という対比に重要な問題があるのではないかと思います。

その重要な問題というのは、台湾漢族、もしくは台湾漢人というものの認識や、三尾先生が言及

された漢化した平埔族という認識、対象の変化という言説がごく最近言われてきています。

実は三尾先生も引いておられる林媽利さんに5月の末に一度会ってきたのですが、現在この方は国家分裂を扇動する人物として、中国への入国を禁止されているということです。

「台湾の歴史と文化」の国際シンポジウムでお話を聴いてきたのですが、本人は決して政治的なことではなく、DNAの鑑定からこのような結論に達していたのだということをしきりにおっしゃっていました。けれども、その背景にある、彼女の結果を受け入れる台湾の世論を見ますと、それこそ極めて政治的な、非常に危ないものではないかと思いました。

先ほど瀬川先生も陳其南先生の名前を出されましたけれども、統一か独立かという、陳其南先生がかなり早くから出されていた問題のもう一つのテーマとして、「同一民族だったら統一する。異民族だったら独立していいのか。では、なぜチベットは独立しないのだ」という言説のなかで、やはり中国のなかでも兩岸問題は極めて政治的な問題です。同じ民族は統一すべきだという言説の矛盾は、かなり早くから指摘されていたと思うのですが、いまその前提条件はDNA鑑定から同一民族さえも違う民族であるという結論を主張し、それが政治的に利用されるというのが台湾の現状です。

最初に戻りまして、「大陸漢族研究からみる」というので、大陸と台湾の漢族研究の比較から言いますと、三尾先生、瀬川先生もおっしゃったように、台湾研究が大陸研究をするモデルになるのだということが、1980年代までわりと一般的な言説としてあったわけですが、現在これは、ほとんど誰も顧みなくなりました。

1990年代から台湾と大陸の人類学研究者の関係は研究交流をしていますが、これは方法論や理論面であって、例えば台湾の人類学者が大陸に行ってフィールドワークをして、そこで短い論文を書くにしても、単行本としては出ていません。

例えば客家研究のシンポジウムをして、両方の研究者が交流するというのは頻繁に開かれています。そこで台湾の大陸に対するまなざしは、学術的だという印象を持っています。

逆に大陸から台湾へのまなざしは、明確に統一工作という生々しい政策が前面に出ています。4年前に北京に行ったのですが、北京では台湾の人類学研究会というのができています。民族委員会の索文清先生などを中心に、都市人類学会のなかで台湾の人類学に関心を持っています。

それはなぜかと聞くと、「これは統一工作の関係で、党中央から、同じ中国なのに台湾の専門家がないのは問題であると提言がなされて台湾研究が始まった」という言い方をされました。実際にいま大陸の研究者で、台湾へ行ってフィールドワークするというのである程度知られているのは、王銘銘さんが中央研究員で半年ぐらいの交換で来られて、台北郊外をフィールドワークされたのが若干あるくらいです。実質的には、大陸パスポートの研究者が台湾に渡って研究するというのは、非常に難しい状況があります。

そこで、コメントから少し外れますが、2月に香港中文大学へ行って北京語が学内で飛び交っていたので非常に驚きました。大学院生の半分ぐらいは大陸から来ているという研究科もあるくらい、中文大学はある意味で生き残りの方針として大陸の大学院生、特に大学院のドクター課程の学生を大量に受け入れる方針があるようです。

歴史学部のDavid Fore教授の下には、大陸からやってきている大学院生ばかりで、彼らの研究テーマは、おしなべて台湾研究です。台湾の清代の研究、もしくは日本統治時代の研究というもので、大陸で台湾研究をするのは資料的に非常に限界がありますので、香港にやってきて台湾研究をして、その研究の名目で3カ月くらい台湾へ行きます。

彼らの研究は決して政治的なテーマではありません。それこそ文学であったり、地域史であったりするわけですが、彼らはだいたい東北出身の学生たちで、香港にやってきて台湾研究をやって、台湾の専門家になっています。台湾人以外で台湾研究をやっているのは、たぶん日本よりも大陸のほうが多いだろうと思います。台湾研究と名の付く研究所は、いま大陸には北京、上海、厦門にあります。

そういったかたちで、台湾研究をすると就職がしやすいということもあるようですし、直接ではないにしても大陸から台湾へのまなざしというものは、かなり政策的な意図があります。

ただし、大陸のまなざしが台湾のなかに持っている台湾人意識の形成、もしくは台湾のなかに持っている大陸の中国人ではないという意識、もしくは原住民と漢民族の混血であるから異なる民族であるという主張を考慮すると、末成先生は予稿集の9ページに、台湾研究で原住民というのはかつてない注目を集めているけれども、「漢族中心的な思考にやや相対的反省の機会を与えた程度にとどまる」と書いておられますけれども、私はもう少し深い影響があるのではないかと考えています。

それはなぜかという、台湾に行きましたら原住民を支援するNGOやボランティアに外省人もしくは平埔族が多くて、お父さんは外省人だけれども、お母さんは平埔族もしくは原住民であるという人たちが目に付きます。

2年ほど前から、自分の民族の帰属を母方の民族にすることもできるように戸籍法が変わりました。そこで原住民が1.7パーセントから3.5パーセントと、この2年間で倍になっており、非常に大陸と似ている状況が生まれています。台湾で原住民の存在は3.5パーセントといっても、彼らの存在感はかなり大きい感じがするのです。

台湾独立のコンテキストのなかで、漢族と違うという言葉によって原住民が非常にクローズアップされています。かつて外省人が非常に権力を持った国民党時代と違って、いまの民進党の時代で外省人の居場所をなくしているところに、原住民への支援に居場所を見つけているようです。いまの台湾の状況に非常に関係していると思うのですが、実は大陸の研究者はこういうところを見ていないのです。

そういったところも含めて、今日の三尾先生の発表は前提条件が非常に大きく変わっているというので、台湾漢族研究者の見えない部分、見たくない部分、もしくは見てはいけない部分というものを、まとめて発表された報告だと思います。以上です。

●座長— それでは聶先生、お願いします。

●聶— 私は、台湾に関してまったく不勉強ですので、今日のコメンテーターには適任ではないことを、まず断らせていただきます。

事前にレジュメをいただいておりますので、先ほど聞きながらコメントを考えました。今日、三尾さんは、時代や社会情勢の変化と共に台湾の漢族の姿の変化や、そのような人々を研究対象とするときの研究視点などについて報告されたと思われます。漢族について、最初ご自身がある程度既成概念をもっていたが、その後、いろいろな変化が見られるようになったにつれて、漢族とは何か、どのように捉えたら良いのか、既成概念よりむしろその実態から捉えるべきではないかなど、フィールドワーカーとしての思考を聞かせていただきました。

人類学は「社会生活の草の根の視点を重視する」ので、確かに実態からスタートすべきであると思います。ただ問題は、どのように実態を捉えるかということです。実態の中に、いろいろな次元

の事実があり、人類学者の研究もそれらの事実を重層的に捉えて統合的に認識すべきだと思われます。

漢人について、いろいろな次元があります。

例えば、まず、出自の次元について、口頭伝承や族譜、移住のプロセスなど実証的研究が可能な事実があります。

次に、本人たちの自己認識の次元。

これについては、人によってその認識がまちまちだと思われます。私の周りの台湾人も様々な自己認識をもっています。例えば、台湾出身の本省人で、日本の大学で教授をしているある友人が、十年ほど前から大陸出身の学者と共に「兩岸関係研究会」を組織し、台湾の独立を阻止することが会の主な趣旨としています。この方は、「華人」のアイデンティティをもっており、そうすれば、自分が漢人であるのも拒否しないでしょう。また、別の友人、1940年代に国民党と共に大陸から台湾に渡った方は、台湾独立派の擁護者で、本人のアイデンティティは、「華人」より「台湾人」です。

かつて一緒に研究会をしたことのある、京都大学のある先生は「台湾人は、対米、対日、対中の三枚のカードをもっています。相手を見てカードを出し、相手が受け入れられるように台湾や、自分自身のことを説明する」と言われたことがあります。

この次元の事情は本当複雑だと思います。

もう一つの次元は、このような自己認識や台湾の捉え方の時代性のことです。時代の潮流やムードも含んでいる時代性の裏には、政治的構造や経済関係、国際関係における台湾の位置づけなどがあります。人類学者が草の根の調査をしながら、このようなマクロ的な動向をも冷静に認識せざるを得ません。

台湾漢人の問題は、おそらくどの次元だけで捉えられるような問題ではなりません。この問題の裏にある様々な要素、その仕組みを統合的に認識すべきではないかと思われます。

●座長— どうもありがとうございました。では三尾先生、それに対する答えをお願いします。

●三尾— 3人の先生方、コメントをどうもありがとうございました。

まず、瀬川先生のコメントについてですけれども、たぶん私がリプライをするべきところは、陳其南さんが提起した土着化という概念は、人類学の枠組み、分析枠組みのなかで比較可能なものとして出てきたのだけれども、いまの文脈が地域の固有性というものにあまりにも執着してしまって、インボリューションをやってしまうと。そうすると人類学自体のブレイクスルーはできなくなってしまったということだと思うのですけれども、そういう理解でいいでしょうか。

それはほんとうにそうだと思います。私自身はそういう台湾の固有性を主張したくなる自分という部分も感じるものがあって、人類学者としてのバランスの取り方というのは難しいと思うところも持っています。

もちろん、スキナーやフリードマンに代わる大きな枠組みが出せるような能力は全然ないので役不足ですけれども、私自身の人類学としての興味としては、いわゆるエスニック・チャイニーズというような人たちが、発生はどうであったか。中原からどのようにしてエクスパンドしていくかという歴史的なことは、私にはよくわかりません。しかし、エクスパンドしていく過程のなかで、いろいろな少数民族を取り込んでいったり、あるいはまわりの人をシビライズさせていくという過程があって、一般に周辺の間人はシビライズされたいというか、チャイニーズになりたいという枠組

みでものを説明することに対して、そうではない何か別の説明の仕組みができないかということ常々考えています。

そのときに、外へ出ていく、エクスパンドしていくチャイニーズが現地化していくとか、少数民族化していくとか、土着の影響を受けていって、漢民族性をなくしていったり、漢民族的なアイデンティティを失っているというのは、いったいどういう状況ならありうるのか。

オーバーシー・チャイニーズの研究などを見ていると、中国人は海外に出ていっても、ずっと中国性を保っています。そして故国のナショナリズムを支援しているし、中国的な文化を保持しているという、チャイニーズネスの議論が語られることに対する別の説明のしかたがあるのではないかと自分としては考えています。ですので、そういったことを議論するために、台湾の友人には「土着化ということに興味があるのなら、台湾でやればいいじゃないか」と言われるのですけれども、私はそこはあえて台湾を外して別のところでやらないと、自分自身のバランスが取れないと思って、もっとほかのところへ行ってもよかったのですけれども、たまたまベトナムに行くことに非常に引かれまして、いまそこをやっているしだいです。ということが、まず瀬川先生への答えです。

中生先生への答えは、基本的に中生先生は台湾のことをよくご存じなので、私は何も言うことはないのですけれども、最後に原住民と外省人のお話をなされたので、それを一つだけコメントします。実は原住民と漢族との関係と、外省人と漢族との関係と2種類ありまして、そこは非常に微妙な問題があって、本省人、いわゆる閩南人とか客家と原住民というのは清朝時代から接触がありました。いろいろな衝突があって、土地を取られたり何なりということがありますので、原住民からすると漢族は伝統的に敵対心を燃やす相手であったのです。

ですので、その本省人と対抗している外省人は、敵の敵は味方みたいな部分がありまして、台湾の政治で、例えば山地で国民党票が集まるのはなぜかという、そういう部分があったりします。かつての国民党政府というのは、山にけっこうお金を落として、道路をつくったりいろいろなことをしましたから、そういうつながりでいまでも原住民と国民党は、あるいは外省人と結び付きやすい部分もあるようです。なので、そこにも政治の影響はあって、それが台湾のなかの民族間関係を非常に複雑にしている原因の一つだと思います。

それから轟さんのコメントについてですけれども、おっしゃるとおりで、いろいろな部分で認識のレベルがあって、それは非常に多様です。たしかに私自身の反省として、これは植民地意識なのかということグループで研究しているときに、私たちはどうしても日本の教育を受けた人たちに話を聞くことが多いのです。そうすると彼らは日本人向けの話というか、自分たちが日本人に話したいこと、あるいはこうやって話せば日本人は喜ぶだろうということ話を話したがる部分は、やはりあると思います。外省人に対して同じではないかということ私も日ごろから言っているのですけれども、なかなか研究としてうまくいかないことがあって、これは課題だなと思っています。

基本的には、先ほどのベトナム、明郷人（土着化したベトナムの中国系移民）についても言えることですが、彼らのおこなっている日常の実践はどうかといったものを、彼は何人であるかということ別としてまず調査します。それと、彼らが語りとして自分たちをどうアイデンティファイするかとか、どう語るかということと突き合わせていきます。そういうかたちで私自身はやっていきたいと思って、いまのところはそういうかたちでベトナムでやっています。



●**座長**— ありがとうございます。残りは20分ぐらいのことなので、けっこうこのセッションは短いのです。いけるかな。その代わり20分を……。どうぞ。

●**加々美**— 短く言います。おそらく次期総統選で当選する可能性がかなりある馬英九国民党主席のことですが、彼はかつて、「新台湾人」という考えを提起しました。馬英九はご存じのように外省の人です。

問題は、渡邊さんが先回コメントしたこととかかわる「華」と「漢」の問題です。つまり華の側について言うと、中国人というアイデンティティと、それに相対する台湾人というアイデンティティがあります。馬英九は実際、新台湾人という新たなアイデンティティを提起したわけですが、その場合に台湾人という概念が、仮に湖南人や広東人と同じものであれば、中国人のアイデンティティの中に包摂されてしまいますので、中国人と同じ次元で対抗できるアイデンティティではないことになります。そこで台湾人というアイデンティティを、中国人というアイデンティティ、つまり華というものから分離して考えていくためには、実は漢に対して平埔というもう一つ概念、カテゴリを持ってこざるを得なかったと私は感じるのです。

例えば、台湾の多くの人に「あなたは中国人か」と聞けば、台湾の人は中国人とは答えたくないところかなりあります。でも、台湾独立に必ずしも賛成していない人たちもです。ところが、漢であるか言うとき迷います。だから漢化した平埔族というように、漢化という言葉をあえてまだ用いるのです。

もし漢化したというのなら、もとは「中国人ではない」という言い方も成り立つわけで、そこで漢と華、あるいは漢と中国というのが、アイデンティティにおいてどうかかわるかということが、このテーマの全体を通じてかなり重要な問題だと思うのです。漢化というのはどういう意味で使っているかという問題が、キーポイントをなすだろうと思います。

実は、内モンゴル人のナリビリカさんも「族群的建構」ということを言っていて、「エスニックグループのコンストラクション」を問題にしているのです（納日碧力戈『現代背景下的族群建构』云南教育出版社2000年）。そのとき彼の観念のなかにあるのは、みなさんが議論していたアイデンティティの問題なのです。実はエスニシティというのを決定する要因には、主体性・客体性の両側面があります。主体と客体のあいだのバランスとして、もちろん主体性を抜いたら成り立ちません。だから主体が自分のアイデンティティをどう考えるか。またそれを客体がそれをどう受け止めるか、そのいかんによって、新たにアイデンティティが形成されるということを言っているわけです。

先ほど瀬川さんが言われた、被調査者の主体性を無視することは、文化人類学としてずっと厳格に否定されてきました。主体性を尊重しなければいけないのはあたりまえなのだと思いますが、ただ主体がどうこう言ったというだけでは、エスニシティは決定されません。それが客体的にどう了解され認定されてくるかにかかわるからです。

例えば主客の織りなす一つの力学において、新たなエスニシティはつくられて良いというのがナリビリカの主張です。それはモンゴル人から提起された、一つの人類的な提起ですけれども、これは実は、1994年に台北で開かれた国際シンポジウムで（中央研究院近代史研究所編『認同與國家：近代中西歴史的比較』1994年）、エスニシティにかかわるアイデンティティの問題が議論されていて、ナリビリカの議論はそれを踏まえているのです。

もう一つ、呉濁流がかつて『アジアの孤児』を書き、それを受け継いで郷土文学を生み出した楊達の問題提起がありました。呉濁流は、台湾アイデンティティに気づいた最初の人物の一人です。

戦前のことですが東京で開かれた福建同郷会でのことです。出席者たちが「私は福建某某県の出身です」と挨拶し合いながら、にこにこ談笑しているのです。その席で呉濁流が、「私は台湾の出身です」と言う。そう言うだけで、周囲から完全に見下され無視されたというのが、『アジアの孤児』の回想録のなかに出てくるわけです。そこで呉濁流は台湾アイデンティティの問題を意識するに至った。主客の織りなす、いったい他者が自分をどう見るかということと、もちろん自分が他者をどう思うかということともかかわりがあるからです。

ちょっと脱線しましたがけれども、長い発言、すみません。

●伊藤— このセッションの課題をもっと広く一般化するならば、要するに我々の研究はマクロなものでもミクロなものでもすべて政治の脈絡の中にあって政治性を避けられないということです。

考えてみれば、東アジアは冷戦当時も、日本の侵略や植民地支配の状況のもとでも、そもそも政治性を避けた地域研究は難しい状況にありました。台湾や韓国が順調に発展をとげ、中国も改革開放政策と経済発展をとげておりますが、いずれも新たな政治的文脈のもとでその都度新たな問題が浮上させてくるように思います。中国の周辺地域においても、中国との関連によってまた新たな状況が生まれており、韓国でもそれを実感します。日本の場合よりもはるかに中国の存在は大きくて、かつては中国について語るのがタブーのようだったのが信じられないくらい、あっという間に韓国中どこでも中国語の勉強を始め、中国への留学生が急増しました。いずれ韓国は中国に飲み込まれるのだというようなことを平然と口にする人までいるほどで、学生から研究者まで中国を意識して動き始めているのです。沖縄でも多少はそうした動きがあって、久米三十六姓の子孫たちの中には、門中の歴史をたどって福建省の一族との交流を模索したりしています。

相互性の中でも関係性そのものを対象としないかぎりには、我々もその政治的な立場を疑われ、そうしたバイアスからなかなか自由になれないという面があります。そこで思い起こすのは、研究対象の設定において形成論的フィールドという概念です。かつてのように対象を固定的に考えるのではなく、相互性の中で絶えず対象を捉え直す過程を重視することで、人類学の観察が生かされ、政治性に縛られずにむしろ自由な持ち味を生かすことになろうと思います。日韓の間ではそれが交流研究や市民連携として実現できそうに思います。民衆のレベルでも経済的な交流においても、そうした展望が見えるという点で日韓関係が東アジアではもっとも進んでいると思います。長い目で見れば他の地域でもそれが現実のものになることを目標にすべきでしょう。

●長谷川— まったく的外れなコメントになるかもしれませんが、あえてクロスオーバー的ということで発言させていただきます。私は台湾研究の状況はまったくわからないのですが、中国あるいは中華世界の辺境である雲南省の国境地帯との比較で述べますと、個別の平埔人などについてはわからないのですが、私に関わってきた地域の状況と台湾のそれとが中国学的な研究としてどんな議論の領域が設定できるかどうかというのが、やはりこのシンポジウムの、このセッションの課題のように感じるわけです。

そのときに費孝通先生が、英語では「コンパクトコミュニティ」という言い方をしていたと思うのですが、漢民族と少数民族が雑居しているような地域社会のあり方というか、そういう複合社会の状況から見たときに、台湾だけの外省人とか本省人、あるいは原住民というタームの有効性はそこだけではないと思います。つまり三尾さんの展開ではなくて、例えば雲南省の西双版纳で考えたときに、こういうことが今起こっているのです。西双版纳には原住民にあたる存在としてプーラン族とかタイ族などがあり、1950年以降ゴム栽培のために国営農場に入植してきた漢民族がいます。しかも2世だ3世だという状況が出てきました。

そういうなかで、観光開発とかが入ってきますと、今度は国営農場の漢民族の人たちが、いわば西双版纳の地元の側から上海や台湾などの大きな資本と結びつき、文化産業に進出しはじめ、タイ族の踊りなどを外向けに提供しています。そうすると、そこで演じられる西双版纳なら西双版纳のタイ族の踊りが原住民化されて、それをめぐって資本を出す側と、民族文化を再構築する側が生まれています。

民族文化をどのレベルで、どのように演出していくかというときに、全体としては中華民族のなかの「何々族の文化」という演出方をしていくわけです。1990年度以降、お金を持って入ってきた人たちがそれを演出できるかというところから見たときに、地元の状況が多少わかるセクターと関係を持っていく訳です。

つまり一つのフロンティアならフロンティアでもいいですけども、そこでおこっている状況というのは非常に交錯的になっている。上海の要素も入っていればさらにグローバルな要素も入っており、それらが文化産業のなかでそれぞれに絡まり合っ、民族文化が創出されていきます。

つまり、対象となる社会が何をやっているかというところが比較研究の問題なのですが、私などの場合はタイ族研究から入っていますので、どうしてもタイ族のところから積み上げて、さらに周辺に広げていくかたちになるのですが、必ずしもそうした方向だけではない研究方法を、むしろ取ってもいいのではないかと思います。

●座長— ほかにございますか。

●伊藤— ただいま言われたことに蛇足ながら少しコメントすると、さまざまな主体はいずれも何らかの形で関連しあっているので、そうしたアクターの属性を踏まえて、さまざまな主体が相互にどのように関わるかを分析すること、いわゆる Actor-oriented Approach が求められるのだらうと思います。

●渡邊— 研究方法あるいは理論、これは大きなシステムに関連するということで、だから台湾は中国研究に対して異質な視点を与えていて、中国研究として台湾を含めると異質な部分があって、たぶん大陸だけの議論を相当ひっくり返せると思います。

だから、絶えず私は1980年代に視点を置いています。要するに、台湾研究を行っている、単に中国研究と言う「地域研究」をしているのではなくて、台湾は全世界を述べる位置にあると、私は思います。ちょっと付け加えますと、ネイションではなくて、ネイションの下にエスニシティ、つまり族群という概念をつくったのは台湾でしょう。

五つですか。第五群までいって、台湾への移民がたしか族群の一つに入っています。移民という族群ができています。さらに族群とは何だという概念も、いま台湾で議論がさかんです。われわれのエスニシティという概念は何だというような問題を人類学に突きつけているわけです。

なにか他にございませんか。たいへん面白いもので、まだまだ。

●塚田— 一ついいですか。

●座長— はい。

●塚田— 素朴な疑問で恐縮ですが、台湾人を漢化した平埔族をとみなす根拠は何でしょうか。

大陸での場合、ご報告のなかで費孝通先生の理論を提示されていましたが、費孝通先生は諸民族の融合の歴史に注目されて、漢族が歴史的に他民族の血液を受け入れてきたこと、そして漢族もまた他民族に新しい血液を提供してきたことを指摘されています。ただし、現在の55の少数民族の存在とそれらの一体性を重視されており、55の少数民族のうち特定の集団が漢民族になったということとは指摘されておりません。その点では台湾と大陸の政治的状況は異なるのかもしれない。

台湾人を漢化した平埔族と見なす根拠として、歴史的文献に依拠するのでしたら、状況証拠にとどまらざるをえないでしょう。確たる証拠はほとんどないがため、どうしても政治的な部分が強調されがちになるように思われます。

例えば漢族になってからも平埔族的な習俗を残しているとか、ほかの根拠としては、習俗などの要素は考えられるのでしょうか。清水純さんが研究されているようにクバラン族の社会が双方向的な社会だったのが漢化してもそうした傾向が残っているとか、そういう言説はあるのでしょうか。

●三尾— まさにその部分が問題になりまして、漢族化した平埔族と言うのはたやすいのですが、ほんとうにそうかという話になると、これは多分に観念的な部分が多いだろうと思います。

一般に非常にパターン化した語りとして言うのは、例えばいまの台湾人の文化にある檳榔びんろうをしきりにかむという慣習は、平埔族から来たのだとみんな言うのです。もう一つは、台湾語の語彙のなかに平埔族起源のものがあるのだということも言います。私は具体的にどれぐらいの語彙の数なのかは知りませんが、必ず出てくるのはカンチウという言葉で、手を引くという。引くというのは何と言いますか。

●高— 牽手 (qian~shou)。

●三尾— 牽手。これは配偶者という意味ですけども、手を引っ張って道連れのようにしていく、連れ合いという意味です。これも台湾語ですが、平埔族から受け継いだ言葉で、これをステレオタイプ、決まり文句のようにしているということです。それ以外に何かあるのと聞くと、うっと詰まるんですけども、「いままでそういうものをちゃんと見てこなかったから、私たちはそういうものを探して歩くんだけみたいなのを言われて、「ちょっと違うんじゃないの」という感じはあります。

先ほど言ったものや、今見たようなものがもてはやされるのは、まさにそういう平埔族、原住民的なもの、非漢族的なるものをどうやって探すかという文脈に乗ってくるから、ああいうものが受けるのだろうと思います。そういう意味では、どこまで言えるかというのはわかりません。

ただ、メリッサ・ブラウンの本を読みますと、ここに文献を出しましたがけれども、彼女はやはり婚姻を重視して語っています。単身で来た男性が女性を娶る。そうすることによって、女性がいち早く漢化するという問題が一つあります。

もう一つのルートは、男性が台湾の原住民の場合、母系の社会が割と多いものですから、婿入りのようにして入っていきます。入っていく社会は平埔族の社会だけでも、漢民族の文化を背負って持っていきますから、そういうかたちでいわゆる漢化というようなことを、原住民の部落に持っていくのです。そういうかたちで漢化するのだということです。

そのときは母系の血筋で勘定をしますから、ずっと平埔族、平埔族と来たのだけれども、気が付いた時には自意識としても漢民族になってしまうときが来るでしょう。メリッサ・ブラウンによれば、「漢民族、原住民の区別が一番目に見えるかたちでなくなっていくのは、日本の総督府が纏足を禁止したあとである」と言っています。それについては、まだ検証はしていないのですけれども。

●座長— 長いあいだどうもありがとうございました。ちょっと感想だけ申します。

もう日本民族というのはなくなりましたよね。actor の問題としてです。私は日本民族というのは actor、あるいは behavior の面で消滅したという話をしているのですけれども、昔、1950 年代に石田英一郎先生を含めて日本民族の研究をしていた。これは私もいろいろ習った覚えがあるし、意識もしたし、日本人論に関する本が 1980 年に出てきました。しかし最近、日本民族という言葉が日本民族学会とともになくなってしまいました。改名してしまいました。日本民族学会という名に対して、だいたい学会事務局のまわりのアパートとかが嫌がりましたけれども、あれが文化人類学会に

変わった段階で消滅してしまったのではないかと思います。

どうでしょう。なくても生活できる時代になったのでしょうか。この後の懇親会でもう少しお聞きしたいと思います。

それでは、これで終わります。どうもありがとうございました。